

BPW UN-CSW インターン派遣事業

第 57 回国連女性の地位委員会 インターン報告書



2013 年 3 月 4 日～3 月 15 日

特定非営利活動法人

日本 B P W 連合会

なぜ、CSW なの？ なぜ、NY へ行くの？

～ミシェル・バチエレ NU Women 事務局長語録より

私たちは、女性や女児の権利を守り、暴力や差別から解放されるよう、最善を尽くすことを心に抱いてここに来たのです。

世界の女性たちを見捨てることは許されないのです。

世界は私たちを注目しています。だから、合意すらできないという失敗は許されないのです。

紛争時の性的暴力を終わらせること、文化や宗教や家族という環境を踏まえて、人身取引の問題、性交や出産に関する権利の問題について議論してきました。

CSW での合意は、女性と女児にとっての尊厳と権利を確かなものとするための第一歩です。女性に対する差別と暴力が無くならない限り、平和も進歩もないのです。

後退はあり得ない。前進あるのみ。

第 57 回国連女性の地位委員会（UN－CSW）

第 10 回インターン参加報告書

目 次

第 57 回 UN－CSW インターンのみなさまへ 日本 BPW 連合会 理事長 松原敏美	2
はじめに	3
インターン名簿	4
インターン参加イベント一覧	5
インターン参加報告	
今井 菜奈	7
加藤 悠理	11
須藤 礼美	15
竹井 莉佳子	19
第 57 回 UN－CSW 女性の地位委員会報告 日本 BPW 連合会 国際委員長 平松昌子	28
付 録	
1 .CSW 女性の地位委員会とは	34
2 .合意結論採択に対する、UN Women のコメント	35
3 .インターンによるおすすめスポット in New York	37

UN-CSW 第10回インターンの皆様へ

特定非営利活動法人
日本 BPW 連合会
理事長 松原 敏美

第10回の節目の年に CSW インターンに参加された皆様が、若々しい感性で多くのことを学ばれたことを、先ずもってお慶び申し上げます。皆様の御報告をまとめて、ここに報告書として発刊させていただきます。

UN-CSW インターン派遣事業は、今から10年前、日本 BPW 連合会が日本の若い女性達に、国際的な意思決定の舞台を、自分の目で実際に見、その場の空気を肌で感じて頂きたいと考え、始めた事業です。

国際社会という枠組みで、物事を発想し、理解する、そのような視点は、時の経過と共に、近年増々その重要性が高まって参りました。

また、皆様がこの時期のニューヨークにおいて、世界から集まった NPO、NGO の女性達が展開する熱い議論や心温まる交歓の中に、これから歩まれる人生の指針となる何かを、感得して下さったことをうれしく思います。

この報告書は、それを手に取るすべての人達に、日本の将来を荷う若き女性リーダーが力強く育ちつつあることを示すことになるでしょう。

皆様の今後のご活躍を、日本 BPW 連合会会員一同心から応援申し上げます。

以 上

はじめに

この度は、私達4名（今井菜奈、加藤悠理、須藤礼美、竹井莉佳子）をインターン生として選出していただき、他では決して得られなかった、かけがえのない経験をさせていただきありがとうございました。

今回のインターンを通じて、世界の多くの国での女性問題を知ることができました。今回のイベントで学んだ数多くのケースは、このインターンの機会がなければ知り得なかったことでした。私達がCSWで触れてきた世界は、私達には想像もできなかったものであったり、日本で生活しては知り得ないものでした。もしこのインターン経験無しに今回お話を聞かせていただいた各国に旅行者として出向く機会があったとしても、このようなケースに触れることはできなかったと思います。それが、この2週間という短い期間の中で触れ、吸収できたことは、私達にとってかけがえのない経験でした。

第57回CSWが終了し、私達は日本に帰国し、いつもの日常に戻って参りました。ただ、私達がCSWで見聞きしてきた事は、そう簡単に忘れられるようなものではなく、より多くの方に知っていただきたいと思う様な、自分達の考え方や人生を少なからずとも変える体験でした。この報告書では、一人一人がイベントで見聞きした事の中でも、最も印象に残った事を中心に作成しています。強く印象に残った事だからこそ、この報告書に書いたケースはきっと将来どこかで私達を支えたり、変えていったりしてくれる事だと思います。私達インターン生が一人一人感じたことを真っ直ぐに皆様に伝え、共に共感し、繋げていっていただくことが今回の報告書のメインテーマです。

また、今回のインターンでは、私達は各自の自主性を重んじ、イベントでの勉強から私生活まで、4人一緒ではなく、各自の興味や必要性に応じて行動いたしました。そのため、見てきた事は皆同じではなく、各自、違った視点、違った角度からの報告ができているかと思います。その事を活かし、この報告書では、イベントでの勉強だけでなく、ニューヨークでの貴重な体験も共に共有したく、『NYでのおすすめスポット』として数ページ設けました。

このページも含め、BPW会員の皆様、今後のインターン生や多くの方々の糧となれば幸いです。

2013 年 国連女性の地位委員会派遣インターン名簿（名簿）

氏名	居住地	所属	生年
1. 今井 菜奈 Nana Imai	（広島市在住）	広島市立大学 国際学部在学中	（1992 生まれ）
2. 加藤 悠理 Yyru Kato	（甲府市在住）	山梨県立大学 国際政策学部在学中	（1993 年生まれ）
3. 須藤 礼美 Remi Suto	（渋谷区在住）	国際教養大学 休学中（株式会社勤務）	（1990 年生まれ）
4. 竹井 莉佳子 Rikako Takei	（新宿区在住）	University College London 卒業	（1988 年生まれ）

※所属は何れも、応募当時のものであり、帰国後それぞれ、大学やこれまでの仕事に戻った者、或いは新しい職場への就職を決めた者など、この体験をもとに次の一步を踏み出している。

なお、このインターン派遣事業に同行した日本 B P W 連合会のスタッフは、村田美夏東京クラブ会長・ヤング委員長代行、平松昌子国際委員長 それに、サイドイベントの応援のため同行をお願いした小泉曜子さんである。

インターンの参加イベント一覧

日付	イベント名	主催者	場所	参加者
3月3日 (日)	NGO CSW Forum Consultation Day		ACC	今井 加藤 須藤 竹井
3月4日 (月)	Asia Girls Campaign	PPSEAWA International and Garden of Hope Foundation	CCUN	今井 加藤
3月5日 (火)	Gender and Climate Change in Asia and Pacific	Asia Pacific Women's Watch	ACC	今井 加藤 須藤 竹井
	The Future Young Women Want: Putting Women's Rights at Heart of the Post-2015 Development Agenda	World YWCA, UNFPA	ACC	今井
	Religion Solutions to Ending Violence Against Women: A Maldivian Case Study	KARAMAH: Muslim Women Lawyers for Human Rights	ACC	今井
	Interrupting the Continuum of Gender and Sexually-Based Violence in the Pacific	Fiji Women's Rights Movement and Development Alternatives with Women for a New Era	ACC	今井
3月6日 (水)	SITUATION AND MEASURES TO ELIMINATE VIOLENCE AGAINST WOMEN	The National Women's Committee of UN NGOs/ The International Women's Years Liaison Group, Japan/JAWW/Permanent Mission of Japan to UN	UN NLB Confer ence Room	今井 加藤 須藤 竹井
3月7日 (木)	Survivors Speak: Prostitution and Sex Trafficking	Congregation of Our Lady of Charity of the Good Shepherd, Coalition Against Trafficking in Women International	SA	今井 須藤 竹井
	Victory Over Violence : Women Leading Through Education	Soka Gakkai International Human Rights Education Associates	ACC	加藤
	Prevention of Psychological Harm in the Face Violence	International Psychoanalytical Association UNICEF	CCUN	加藤

	Violence Against Women in War Zones: Prescriptions for Ending Systemic Failures in Preventing War Crimes	KARAMAH: Muslim Women Lawyers for Human Rights	CCUN	加藤
	Marriages Without Happiness or a Future: Child Marriage, Polygamy and “Traditional Values”	Open Society Foundations, International Women’s Program	CCUN	今井 竹井
	Celebration walk~ Global Women For Equality, Development and Peace	NGO CSW/ NY Forum	streets	須藤 竹井
3 月 8 日 (金)	Equal Pay Day	International Federation of Business and Professional Women	SA	今井 加藤 竹井
	“A Harvest of Shame ” Elimination and Prevention of Women and Girls re HIV/AIDS	Voices of African Mothers, inc.	CCUN	今井
3 月 11 日 (月)	Educating Women and Girls for Communities Free of Gender – Based Violence	Unitarian Universalist United Nations Office	CCUN	今井 加藤
3 月 13 日 (水)	How to Protect the Right to Health of Women and Children from the Nuclear Accident in Fukushima?	Human Rights Now	CCUN	加藤
	Women Working Together Against Violence	NGO Health Committee New York University College of Nursing, Soroptimist International	CCUN	今井 加藤

ACC : American Convention Center

CCUN : Church Center

SA : Salvation Army

第 57 回 国連 女性の地位委員会 インターン参加報告

今井 菜奈 広島市立大学 国際学部在学中（派遣当時）

—インターンの始まり—

私たちの活動が本格的に始まったのは、ニューヨークに到着した翌日の3月3日である。この日は Consultation Day として、朝から CSW に関わる多くの人々が集まり、パネリストたちのスピーチを聞いた。

会場に到着すると、CSW に関するたくさんの資料を貰った。大勢の人がいて、すでに満席。午前中は部屋の端っこに椅子を並べて傍聴した。

劇、ダンス、歌を交えた4人の女の子の発表から始まり、15人程度のパネリストが順に話をしていった。特に印象に残ったのは、Ring the Bell Campaign の話である。このキャンペーンは女性に対する家庭内暴力が問題となっているインドの団体、Bell Bajao が主催しており、家の中から喧嘩の声や女性が叫んでいるのが聞こえてきたら、それに気づいた者がインターホンを鳴らして喧嘩や言い合いを中断させ、女性が暴力を受けるのを阻止しようというものだ。他人が夫婦喧嘩を割って入るとは大胆な行動だとも思ったが、深刻な状況を打ち破るにはそれくらい大胆な行動も必要なのかもしれない。スピーカーの、「すべてを解決することはできないが、解決へのきっかけを作ることが大切だ」、という話には非常に納得させられ、以降約2週間のインターン生活で様々な NGO の活動を知る中、度々思い返される言葉となった。他のパネリストからは、女性にとって最も危険な場所は家であるという話や、人身売買の問題について、人身売買の責任を握っているのは政府だから、NGO が問題を訴えるだけではなく、政府と NGO との協力が必要であるという意見があった。自分にとって新しい現実や考え方を知る良い初日となった。

—Parallel Events—

3月4日以降は、世界中の NGO によるパレレルイベントに参加した。世界中でどのような問題が起こっているのかを知りたいという思いから様々な地域の NGO によるイベントに参加したが、中でも最も強く心に響いたのは3月13日の NGO Health Committee New York University Collage of Nursing, Soroptimist international によるイベント、Women Working Together Against Violence である。

●Women Working Together Against Violence (13th March 2013)

(NGO Health Committee New York University Collage of Nursing,

Soroptimist international)

@Church Center

このイベントでは、アフリカで起こる女性への身体的・精神的暴力について被害を受けた女性たち自らが話しをしてくれた。アフリカ中部では、女性の地位を虐げる多くの悪事が起こっているというメッセージや、女性がレイプされると、彼女、そして彼女の家族は恥を受けることになるという事実を聞いた。このイベントの中でも最も私が衝撃を受けたのは、紛争地域で、妊娠した女性のお腹の中がどのようなになっているのかというただの興味で、男が女性のお腹を切開し、楽しんでいたという話だ。あまりに衝撃が大きくて、何とも言えない複雑な気持ちになった。会場では、涙を流している人もいた。私は、彼らは、女性を人間だとは思っていないのだろうか、尊厳を持たされるべき命だと認識していないのだろうかと思った。また、ルワンダでの紛争後、レイプされ悲しい表情を浮かべた一人の少女に出会い、女性の暴力撤廃・地位向上のために活動することを決意、世間に問題を訴える力を持たないこのような少女に代わって事実を人々と共有すべく、CSW に参加していると話す女性もいた。使命感に満ちている彼女の話はとても力強かった。“We need your help” というストレートな言葉からは、彼女たちは本当に困っており、どうかこのような現状を知ってもらい、協力を求めようと、ニューヨークまでやって来たという思いが伝わってきた。

繰り返される女性への暴力をなくしていくために必要なことの一つは、各国の NGO が協力することだという。しかし、政府の弾圧により各国の NGO の協力体制を整えることは難しいとも話していた。同時に、彼女らは、先進国の行動も指摘していた。紛争地域では多くの女性問題が起こっているが、先進国は紛争を悪化させる武器をアフリカに売っているのが現状であり、彼女らは、政府間で悪い取引が行われていると訴えていた。

さらに、アフリカで被害を受ける女性側にも責任はあると述べていた。女性がなすべきことは、自分の地域の文化を考え直すことである。アフリカでは子供を育てるのは女性であるから、女性の知識、考え方は子供たちに伝わり、浸透する。討論や決議に、より多くの女性が参加することも大切だと言っていた。これに対し、イベントに来場者として参加していたアフリカ人女性が、「これ以上何をしろっていうの！」と反撃していた。家事に子育てと、精一杯生きている女性の本音であったのだろう。本当に、きれいごとでは解決しない問題なのだと感じた。

そこにいた女性たちは、息が詰まるような残酷な被害を受けたり、その様子を見たりしている。それにもかかわらず、被害を訴えるだけではなく自分たちの反省点も伝えていたことに私は驚き、彼女たちを尊敬した。また、どんなに辛い経験をしていても、彼女たちは自尊心をしっかりと持っている。重労働な家事をこなすのも、子供を育てるのも女。“Women are strong” という言葉には、問題と戦いながら前向きに生きていく彼女たちの力強さを感じた。

この他に参加したイベントは、インドでは災害時、男性よりも女性の死亡者が多いという話に考えさせられた“Gender and Climate Change in Asia and Pacific”や、私と同年代の女性が女子割礼などの問題についてスピーチし、将来の望みは何か、問題解決のためには何が必要かを訴えているのに聞き入ってしまった“The Future Young Women Want”、伝統的な宗教の規律を守ることと、自分たちの権利を守ることとの間で葛藤している会場のムスリムの女性の姿や、世界の情勢を学ぶと同時に、多くの宗派を持つ宗教について学びを深めることが相互理解に繋がる、教育は相手を理解する思考を担うためのツールであるという話が印象的であった“Religious Solutions to Ending Violence against Women”、レイプや人身売買、虐待があったとしても、それ自体を『いけないこと』だと認識していない人がいるように、太平洋諸国での女性の地位問題に対する関心の薄さを指摘した“Interrupting the Continuum of Gender and Sexually-Based Violence in the Pacific”、それから、日本の男女の賃金格差是正が世界に後れを取っていることを痛感した“Equal Pay day”などである。

様々なイベントに参加しお話を聞く中で、女性の地位向上のために共通して必要だと考えられているのは、女性問題に関するリーダーシップ、NGO と政府との協力、議論や決議への女性の参加、そして教育であると感じた。また、どのように問題を解決に導くかという方法云々以前に、女性の地位が虐げられているということをもっと問題視するべきだという意見も多かった。異なる地域、異なる環境下には多くの女性問題が存在していること、そして世界中には解決に向けて活動している人がたくさんいるのだということを感じた。

—BPW Japan インターンとしての仕事—

3月6日は、BPW Japan が携わるイベントがあったため、インターンとしての仕事をした。自分の役割は来場者を誘導することと、混雑が予想された会場内で質問者にマイクを渡しに行くことであった。誘導係としての工作中、国連の建物の中でプラカードを持って案内していると、日本の皇太子様や国連事務総長の潘基文氏が目の前をお通りになるというめったにない体験もできた。マイクを持って質問者のもとへ向かう途中、別の来場者に資料を持ってくるようにと足止めされてあたふたし、余裕のなさから自分の表情がこわばってしまったことは反省であるが、誘導中、イベント開催中に声をかけてくれた人々に、自分なりに誠意を込めて対応できた点はよかったと思う。私がイベントの事前に行ったのは、アメリカでは手に入りづらい A4 サイズの紙を日本からニューヨークへ持って行ったり、誘導用のプラカードを書いたりするといった小さな仕事であったが、ミスはできないという緊張感からか、イベントが終わった時は、安堵と解放感でいっぱいであった。各国のイベントに参加するだけでなく、このような国際的な場で主催者側としてイベントに携わることは、多くのことを感じられる貴重な経験となった。

—全体を通して感じたこと—

2週間のインターンを通して感じたのは、様々な問題が存在する中で、その状況を変えていこうと行動を起こしている人々がここに集まっているのだということ、NGOで活躍している人々は、問題を一気に全て解決しようとしているのではなく、問題解決の第一歩となるようきっかけを作り、アクションを起こそうとしているということである。また、政府は、例えばミレニアム開発目標のような見通しを立てることが多い一方、NGOは、たった今起こっている問題を解決するためにできることを、例え小さなことでも、着実に実行しているように感じた。政府とNGOの協力の必要性が多くのパラレルイベントで訴えられていたが、「地道な行動」無くしては「全体的な目標」に近づくことはできないのだから、両者の協力は大切であると実感した。

FGMや強制結婚、売春などについての話を人々から直接聞いたとき、インターネットや本、授業を通して知っていたことが実際に起こっていることとして、自分の中で現実のものとなった。正直、ショックを受けたこともあったが、女性の問題を考えていくうえで大きな財産となったと思う。

とはいえ、私自身はまだ日本に住む学生であり、CSWに参加して問題を訴えていた人々のように、当の問題を自分が経験してきた訳ではない。社会には自分が知らないことがまだまだあると痛感したのも事実である。もしかすると、これから生きていく中で女性差別のような壁に当たることもあるかもしれない。しかしその時にはCSWで出会ったパワフルな女性たちのこと、今回感じたことを思い出し、力強く生きてゆきたいと思った。

—きっかけ—

CSW57 に参加しようと思った理由は大きく 2 つある。1 つ目は、女兒に対する教育の大切さについて興味があったからだ。当たり前のようで、最も大切な教育。女兒へのその影響について、世界を舞台に見聞きたいという思いがあった。2 つ目は、国連という組織について関心を持っていたからだ。漠然とした憧れを持っていたものの、仕事やその内容については具体的に思い浮かばない状況であった。働く人の声や、自分の目で見たことを通じて将来に役立てたいと思った。また、このインターンをきっかけに、日本やアジアという自分にとって最も身近な地域社会の問題について「女性」というテーマから探究してみたいという考えなどから、参加を決意した。

—活動内容—

インターン中は、主に 4 つの活動を行った。

- ① 政府の本会議への参加(傍聴)
- ② 世界各地から集まる NGO 主催のイベントへの参加
- ③ BPW JAPAN のイベント補佐
- ④ 国連大使、外務省、CSW、NGO、BPW International の方との交流会

—イベント内容—

活動のうち②にあたるイベントに関し、特に印象に残ったものを挙げる。

I. Date: Thursday, 7 March

Title: Prevention of Psychological Harm in the face of Violence

Sponsors: International Psychoanalytical, UNICEF

南アフリカや 90 年代アメリカの黒人の子供に対して心理学的側面から追跡取材を行った結果の発表が主なものであった。

前半は南アフリカの子供 3 人に対して 10 年以上の追跡取材を行うなかで、子供たちが夢と現実をどう語っていくかというビデオの発表だった。ある少女は 4 歳頃、インタビューの将来の夢は？という質問に対し、「学校に行くこと！」と満面の笑みで答えていたのが印象的だった。年齢が上がり、学校に行くことができたときの夢は、「陸上選手になること」。そして卒業してからは、家族を支えるために懸命に働く姿が映されていた。その際の夢は「自分の子供が十分な教育を受けて働けること」。年齢が上がるに

つれ、現実を見ると同時に夢が受身が変わっていく。現地の子供たちのリアルな生活や悩みが端的にまとめられたドキュメント映像だった。

映像の他に、自分の姿や家族、家など子供たちが描いた絵から、恐れているもの、望むもの、劣等感を感じるものを読み解いたものが紹介されていた。暴力を受けた子供が描いたものは、親やリーダーを怖がるもの。90年代アメリカの黒人の子供が望むものは白人と結婚して、青い目の子供を産むこと。そしてお金もちになること。ほかにも、心に傷を負った子供達への支援の様子も紹介されていた。

今までどこか遠くの国の遠くの問題のようにとらえてしまった数々の被害や問題。それが子供というテーマで話されたことで、とても身近に感じる事ができた。貧困や紛争が発生した時、被害をまず受けるのは子供だということ。しかし、どの国の子供も同じように希望や夢を抱いているということや、その大切さを改めて感じた。

このように現地の問題を心理学というツールを使って解説していくこのイベントはとても興味深かった。UNICEFの活動の一例を知るとともに、子供たちの心理的問題の深刻さも知ることができた。

「子供たちは宝だ」と力強く語った学者の声がとても心に残っている。

II. Date : Monday, 4 March

Title: Anti Gender-Based Violence Against Women - Prevention and Services

Sponsor: The Taipei Economic and Cultural Office in New York

Date: Wednesday, 13 March

Title: How to protect the right to Health of Women and Children from the Nuclear Accident in Fukushima?

Sponsor: Human Rights Now

今回参加するにあたってのテーマであった、アジアの女性問題。アジアのイベントには積極的に参加したが、その中でも印象的だったのはこの2つのイベントだ。まず1つ目は、台湾のイベントについて。CSW57の開会式の際にパフォーマンスをした、DVなどの被害を受けた少女たちの団体のようなものの紹介や、農村部などの女性の被害のレポートだった。経済格差が地域によって激しい台湾は、それに比例して教育格差も激しい。そこから生じる女性の地位の低さ。それは今回 CSW57 で一貫して議論された題の1つのようにも感じた。特に、アジアやアジア周辺の今まさに経済発展の途中にあるような国に多い。今まで発展途上国にばかり問題に目がいていた私には新鮮な発見であった。同時に、非常に身近に感じる議題であった。

こればかりでなく、日本のイベントにも多く足を運んだ。日本の団体が世界にアピールする国内問題に興味があったからだ。イベントの多くの議題は東日本大震災に関連して、福島原発のことだった。「日本政府の情報操作」「女性、子供への被害」など、

様々な観点からパネリストが発表していく中で、私の興味が特に湧いたことは、パネリストと参加者の質疑応答の際の議論だった。封建制度の延長のようなものが日本の女性を苦しめているのではないか？というものだ。それは日本社会の悪い点ともとれるし、あるいは文化だと言い切ることもできる。確かにこの点については私もよく感じるものがあつた。日本のジェンダー問題や、それに関するレベルの低さの根幹はここからきているのではないかと考えたこともある。しかし勉強不足のために、その場ではっきりと自分の意見を述べる事が出来なく、悔しい思いだけが残った。

—インターン全体を通して—

約 2 週間のインターンを通して、まず感じたことは世界中の女性のパワーだ。どの国のイベントに参加しても、女性たちのパワーに圧倒される。また、様々な質問などを利用し、自分をアピールしていく。このような機会を体験したことがなかった私は、最初はただ圧倒されるだけだった。徐々に英語に慣れていくと、自分のことや相手のことについて周囲の方と話し合うことができたが、そのような様々な出会いも私にとっては強烈な体験だった。年が近い方、同じインターンとして参加している方にも多く出会った。スペシャリストとして参加している方と話し合う機会もたくさんあった。そのような中で私が 1 番感じたことは、やはり英語は重要なツールだということだ。しかしそれより、何を伝えるかが大切で、それがパワーになるということが、身を持って体験することができた。

女性問題について話し合う。このテーマは出国前、私にとっては少し重たいテーマのように感じた。しかし、それはただの社会問題の切り口に過ぎない。経済、政治、社会、地域などいろいろな観点から女性問題を見ることができる。世界を見てから、日本を振り返ることで様々な問題に気づく視線を持つことができた。特に日本はジェンダーに関しては世界、ましてアジアで最低レベルである。

まず世界の問題を調べる前に日本のそのような点を歴史的観点や意識の点で研究してみたいと思った。

また、NY という土地や国際連合で働く方、外務省の方、NGO の方、同世代のインターン生などを通じ、刺激に溢れた 2 週間を過ごすことができた。具体的な将来像が少し見えてきた気もする。私の人生の中で、このタイミングでインターンに参加でき、様々な事に触れられたことは、本当に価値観や将来への大きな影響を頂いたと思う。

インターンの中では、思っていることが思うように伝えられないという語学の壁に何回も直面し、悔しい思いもした。海外の同世代と比べても劣る専門知識など、自分の拙い知識に苛立ちさえ覚えた。もっと日本のことを詳しく知っておけばよかった。自信をつけておけばよかった。それに伴い、1 回くらいマイクで堂々と発言をしたかった。これが今回のインターンでの後悔だ。

今後は、学校内外での報告会、語学の向上のための留学、ここで培ったことに関する研究、自分の地域のジェンダー問題解決などを積極的にしていくつもりだ。

このような素晴らしい機会を頂けた BPW JAPAN の皆様には心から感謝致します。



Figure1
(Prevention Of Psychological
Harm in the Face of Violence)



Figure 2
(High-level round table on
the priority theme)

—Consultation day (4th March 2013)—

@Armenian Convention Center ballroom, 630 Second Ave (and 35th Street)

内容：『GIRL Be Heard』による歌、ダンス、寸劇での女性に対しての暴力についてのオープニングパフォーマンス。ミシェル・バシュレさん (Under-Secretary-General and Executive Director, UN Women) によるスピーチ。今回の CSW のテーマについての基本方針や要旨についてノーベル平和賞を受賞した Tawakkel Karman さんから発表。『女性・女子の人身売買』についてのパネルディスカッション。『男性の役割』についてのパネルディスカッション。『女性・女子に対する暴力を防ぐ一番の手法』についてのパネルディスカッション。ゲストスピーカーたちによるメディアの影響やメディアとのコラボレーションを使った『ソーシャルメディア・コミュニケーションを使ったトレーニング』プレゼンテーション。9時から17時までと丸一日を使った開会式のようなものであった。

感想：最初の『GIRL Be Heard』による歌、ダンス、寸劇での女性に対しての暴力についてのオープニングパフォーマンスが大変インパクトが大きく、影響力があり、見入ってしまった。高校生ぐらいに見受けたが、彼等の表現力、そして劇中で語られている「女性・女子に対しての暴力」の内容が、私にとってとても衝撃の大きいかなりショッキングな内容だったため、エンターテインメントとシリアスな問題を融合し、人々に訴えかけようという手法に文化や考え方の違いを感じた。個人的には多くに訴えかけ広げていくにはとても良い方法なのではないかと思った。参加者は本当に世界各地から来ており、人身売買についてはアフリカの方からのコメントで、『私たちは怒っている！もう私たちの子どもや、隣人の子どもが売買されているのは我慢がならない！』と怒りを表現し、その人身売買の背景には国を超え人身売買をしている人たち、さらにその背景にある需要など深く掘り下げ考える必要があることを伝えて下さった。私の人生の中では身近になかった事が、彼等を目の前に彼等の言葉で聞く事でもものすごくその問題が身近に感じ、今まで私が考えてきたことは何だったのだろうと少し悲しくも感じた。この Consultation Day の場で、何度も聞き、たくさんの方が訴えていた事は、「この場を共有し、たくさんのお話や体験談などを共有した私たち一人一人が、国にもどり伝えることが私たちの義務であり、すぐに行動に移せる変化に繋がる一歩なのだ」という事であった。他のインターン生3人とも今回のテーマについて休み時間等の間に意見交換などができ、とても有意義な一日、そしてスタートとなった。

—Parallel events—

体験者たちの声～売春と売春婦売買～ (7th March 2013)

@Salvation Army 221 East 52nd Street (Between 2nd and 3rd Avenue)

売春の経験者4名（カナダ、アイルランド、アメリカ2名そのうち1人はニューヨークから）と、台湾からのパネリスト1名

司会進行役の方が売春についての問題提示をし、それにパネリストが答えていくという形式。たくさんの人が開場に集まり、男性は圧倒的に少なく、ほとんどと言っていい程いなかったが中にはカップルで話を聞いていた人たちもいた。とても印象的だった。体験談や、売春の実態などをパネリストから聞き、彼等から聞く話は、私の『売春』というものの世界を覆し、売春に対して持っていた固定概念を取り払ってくれたように思う。

売春というものに対して深く知ろうとも思ったことはないし、私の生活には全く関わりのない世界だったため、メディアから受ける情報で私の『売春』というものはできあがっていたのだが、おどろいた事は、売春をしているほとんどの人たちはやりたくてやっている人たちは全体の1%以下でしかない、ポルノ業界という『教育者』が売春の需要を生み、売春の人身売買が生まれ、女性の暴力に繋がっていくのだということ。誰が売春をしているのか？政治家、近所の男性、旦那、彼氏等、私たちの周りで起こって生まれているものなのということ。

そして、売春をしている女性達が男性に暴力にあい、生命を脅かされるような状態にいる時に警察すら助けてくれず、被害者である女性たちは逆に加害者として扱われてしまい、助けが欲しい時に助けてくれる人が誰もいないのが現状であるという。そのため、パネリストたちはそのような女性のサポートや助ける場所を提供するための団体に属し、又は作り、活動をしている。中には政府や行政と活動している団体もあった。彼等は決して理想を語っているだけではない。どうしたら売春がなくなるのか？という質問に対し、この世の中に需要がある限り、なくす事は無理であると認めており、今何ができるのかと考えた時に、二つ短期スパンでできる、今できうる事、そして長期スパンでの考えを述べてくれた。

それは、女性をサポートする場を増やす事、警察などにも協力的になってもらう事。そして教育である。ポルノ業界がある限り売春の需要を減らすことは出来ない。若い世代から売春の実態や体験者の話を聞く教育の場を作ること、その世界に入る女性を減らす、そして男性にも女性達がそのような状況にあるという事実を知ってもらう。そうやって売春、そしてそれらに関する問題を減らしていけるのではないかという結論だった。

—CSW Briefing (5th March 2013)—

@Church center

前日の本会議での話し合いの内容を国連の方からNGO団体の今回のCSW57の参加者への報告（今回の参加者の現時点での総数なども）、そして今後どのような流れで話し合いが進んでいきそうなのか、などの情報共有がメイン、そして質問、各自団体のパラレルイベント告知の会。

今回のCSW57は『女性と女兒に対するあらゆる形態の暴力の防止と撲滅』というテーマだっただけに、皆からの期待がとても高いという事と、それに向けての実施、施行とのギャップがある。

イエメン、サウジアラビア、パキスタン、ロシア、インドネシア、エジプトなどのクロスリージョナルカントリーはこの問題に対し制限をかける事を求め、フィリピンは改正案を求めている。

後進国や先進国でも女性に対しての暴力は問題であり、この問題に対しての標準・基準というものが大事になってくる。今まで制度的変化としてあったものは、予算、法律、インフラや公的サービスの充実などである。この問題は男の人たちもちろん内部に関わる問題であり、彼等の教育やどうこの問題に関わった人たちを癒す・治すのかが課題である。

私たち唱道者の役割というのは、この問題に対する認識率を上げる事、女性への暴力はもってのほか、被害者たちにもっと知識や情報、そして発する場と機会を与えることだ。今このCSW57の機会を最大限に活用すべき。などなどわかりやすく情報共有してくれ、私たちの役割も分かりやすく提示してくれた。

この会では本当に分かりやすくこのテーマに関しての世界中の問題、世界でとりくんでいることや、毎年行われているこのCSWでの変化や国連の動きなどを説明してくれた。このブリーフィングは結構たくさんの世界各地からの参加者がいたので、彼等の言葉で現状や、変化をきけたことが良かった。そして国ごとにこの問題に対して質問し合ったりしているところが、小さい本会議のようであった。

—BPW International Claire Fulcher's Dinner—

@3 WEST CLUB 3 West 51st Street New York, NY 10019

BPW International の会員さんが集まる、『Claire Fulcher』を思い出す夕食会。6時より軽食と交流、7時夕食スタート

前の日本政府国連代表部でのブリーフィングが遅れてしまったため、遅れて8時頃、夕

食からの参加。BPW=Business Professional Women というだけ集まった皆さんは様々なビジネスをされていて、開場に入る前に料金を支払う場所でテキスタイルデザインをなさっている方のスカーフをプレゼントで頂いた。天井が高くとても素敵な場所で夕食をしながら、クレアさんの思い出話を前 BPW International 会長のエリザベスさんが、そして仲のよかった友人たちが次々にスピーチをする。そして BPW International の曲に合わせて皆で踊る時間があり、上手に踊った人たち 3 名は参加者が寄付してくれたそれぞれのプレゼントを貰えた。そのあとは、BPW Youth member がくじチケットを売って歩き、その後にくじ引きで、ダンスの時と同じような皆さんが提供して下さった商品を当たった人が貰えるというとても楽しい時間もあり、BPW 東京メンバーが何度も呼ばれていてとても嬉しかった。最後にはステージに上がり私たちをエリザベスさんと平松さんが紹介してくださり、一言会場の皆様に挨拶させて頂く時間もあった。新しい出会いと繋がり、そして西洋文化らしいディナー会を体験できとても素敵な時間となりとても幸せだった。

—インターンの始まり—

BPW インターンとしての活動はニューヨーク国連本部での CSW のイベントだけでなく日本でのミーティングから始まっていました。ニューヨークに出発する前、数回のミーティングがあり、顔合わせから始まって、私たちインターン生は頻繁に連絡を取り合いながら現地でのホテルやフライトを決めたり、滞在中の計画を立てていました。そのやり取りを私達自身に任せてもらった事は、最初は知らない者同士ですし、連絡を取るのもとても大変でしたが、そのやり取りを通して CSW が始まる前に仲良くなることができ、現地では初日から意気投合してとても楽しい時間を過ごすことができました。きっと他の BPW の方々と同じホテルやフライトを一括して予約してもらったらお互いが楽ではあったと思いますが、このやり取りが無ければインターン生同士が現地であそこまで仲良くなれてはいなかったな、と感謝していると共に、今後、何かの機会があれば是非この方法を取りたいと思いました。



—ニューヨーク CSW での体験—

CSW の開催中、日本は国連機関 UN Woman と共に国連本部で日本の女性問題と DV に言及したイベントを行ったり、他のアジア諸国と共に環境問題と女性の問題について言及したり、と様々な視点から日本の女性と DV、その状況を世界に訴えていました。私たちインターンはその中で、日本主催のイベントの運営のお手伝いとして受付や案内をしたり、他の団体の開催するイベントに参加し、他国・他文化での女性の置かれている状況を学びました。CSW のイベントは、各国・各団体ごとに様々な表現方法で女性の置かれている状況をリアルに伝えてくれる場でした。

アメリカに住む移民の少女たちがステージで歌やダンスの入った寸劇で女性に対する暴力を訴える『Girl Be Heard』のパフォーマンスや、インドの女性への暴力と差別の根絶を目指す団体 Break Through によるアクション。ソーシャルメディアの力を使う大切さを見せた『Ring the Bell』の人々の記憶に残る興味深いショートフィルム。『体験者たちの声～売春と売春婦売買～』と題したイベントでは、元売春婦の女性達が実際に舞台の上でトークショーをし、彼女達が実際に体験した仕打ちや、なぜ売春婦になったのか、なりたくてなったわけじゃない、など、数々の話を聞くことができました。リアルに真っ直ぐ心の中まで届くようなイベントが多くあり、今まで自分が想像もしなかった世界に触れ、その人々の力強さに圧倒されました。



Ring the Bell



Girl Be Heard

—強制結婚と女性の夢—

3月7日

タイトル: Marriages Without Happiness or a Future: Child Marriage, Polygamy and “Traditional Values”

主催者: Open Society Foundations, International Women’s Program

多くの衝撃的な事実が語られたイベントでも特に私の心を動かしたイベントはロシアの片田舎のチェチェン共和国の強制結婚の話でした。

チェチェン共和国では、女性は大学には行かず、早いうちに結婚してしまうことが彼女にとっての1番いい選択肢だと考えられ、両親や祖父母（家族3世代が共に住んでいることが多い）から早期の結婚を強制させられます。それは時に、30歳も40歳も年上の男性で

あり、女性は自分が結婚する相手に会ったことがないまま結婚式当日を迎えます。この土地では父親の言うことは絶対であり、選択肢は、父親の言う通りにする or 家族を出るしかありません。



寸劇の様子

イベントの寸劇では、高校生の女の子が『大学に行って医者になりたい！』と強く志しており、その為に家族と大喧嘩をします。彼女の祖母は頑なに結婚を強制し、彼女の言うことは聞きません。母は優しい話し方で一見娘の味方の様に感じますが、祖母の発言に反対することはできず、『おばあちゃんとお父さんが言ってることには逆らえないから…』と遠回しに彼女に結婚を迫ります。最後の希望に、同じ境遇だった人なら理解してくれるだろう、と、先に結婚して嫁いで行った姉の家に行くと『あなたの気持ちはわかるけど、私だって結婚したんだからあなただけ自由になんてさせない』という仕打ち。彼女は誰にも頼ることができず、家族全員と不穏な空気が流れたまま寸劇は終わります。

そして、オーディエンスに問います。
『どうすれば、彼女は家族を説得できると思いますか？どのように話せばいいかわかる方、前に出てきてストーリーの続きを一緒に演じて下さい。』
とても難しい問題です。一人の女性（近隣の国の出身者だと思われる）が挑戦しましたが、うまくいきません。このイベントを主催した団体は、そんなケースを助けるために偏見も多い中で頑張っています。



オーディエンスの加わった寸劇

若いチェチェン女性はロシアの片隅で、紛争が起こるような危険な土地で、それでも自分の将来に夢をはせている。でも、状況は簡単に奪回できるものではありません。チェチェン共和国はロシアの片隅にあり、ロシアの法律よりも地域のルールが強い場所。法律的には間違っているような女性の扱いがまかり通ってしまいます。望まない結婚をしたストレスを抱えた母体から生まれてくる赤ちゃんは119人中30人が生まれた直後に死亡し、死亡しなくても、多くの赤ちゃんが成長過程で精神的に問題を抱え、後々障害に悩まされます。その状態は一家族だけでなく、その地域全体の問題となっています。

女性は若ければ若いほど健康で出産にもいいと間違った考えがまかり通り、10代のうちに結婚・出産を行っているのもまたこの状態を作る原因です。

彼女達はこのイベントで、助けを求めている女性を助けるだけが仕事ではなく、その環境・考え方自体を変える事が大切であり、その為には教師、医者、弁護士他のスペシャリストと共に活動し、学校での授業など、幼い内から考え方を変える様な行動をしなくてはいけない、と力説していました。大人になってからでは人の考えを変えることは難しい、とても時間がかかるであろう悲しい状況です。

このイベントは、学生からおばあちゃんの年齢の方までの5名の女性が発表しており全員が英語が達者なわけではないのでビデオと寸劇が中心でした。

英語とロシア語が混ざり、大学生の女の子が通訳を挟みながらの寸劇は、すごく感情がこもっていて、本当に『一人でも多くの人に伝えたいんだ！ 知ってもらう事がこの現状を変える術なんだ！！』という力強い思いを感じました。彼女達は、多くの人の人生とか、期待とか、未来とか、多くのものを背負ってニューヨークまで来たんだろうなと感じるイベントでした。

寸劇を見ながら、自然と涙がこみ上げ、心を揺さぶられ、是非話しをしたい！と思ってイベント終了後に話しかけ、30分以上質問をさせていただき、タイムオーバーとなったため、連絡先を交換して終わりました。

このCSWで参加したイベントで一番心を動かされ、深く参加したいと思ったイベントでした。



このイベントの主催者と

—抗議行進を体験する—

3月7日

タイトル: celebration walk~ Global Women For Equality, Development and Peace

主催者: NGO CSW/ NY Forum

CSW は室内でのイベントだけでなく、抗議行進の様な外で行われている活動もありました。偶然朝のミーティングでその事を知った私と同室のインターン生礼美は、ミーティング後直接この活動に参加しました。



この行進は国連本部の周りを『equality, development and peace!!!』をみんなで大声で言いながら歩くものでした。参加者は皆とてもフレンドリーで一体感があり、イベント自体はとても楽しかったです。見ず知らずの年齢も国籍も違う女性達が集まって行進している姿はとても異様だったのか、道路工事のおじさんに『何のイベントだい?』と聞かれました。『女性に対するDVに訴える行進です。』と説明したところ、『まあ、それはよくあるヤツだからな…難しいよな。』とボソッと呟いて空気を遮断してしまいました。きっと彼の周りでは女性に対するDVが日常的に行われ、もしかしたら彼自身もバタラーな

のかもしれませんが。そんな感じで遮断された見えない壁。本当はこんな人達にこそ参加してもらい、理解を深めてもらうイベントでなければいけないんだな、と感じました。

—DV に対抗するインパクト！—

3 月 3 日

タイトル：The power of social media 『Ring the Bell』

主催者：Break Through

もう一つ、CSW のイベントでとても印象強かったのはインドの夫から妻への DV を制止するためのキャンペーン『Ring the Bell』でした。

Break Trough という団体が作っているショートフィルム『Ring the Bell』は、地域を巻き込んだ DV の制止方法を何パターンも提唱しており、その作りはとてもユーモアあふれるものです。その面白さから、初めて観た人は引き込まれ、記憶し、多くの人に見せたいくなります。Break Through が“the power of social media”と呼んでいるその方法は、とても大きなパワーを持ちます。



世界各国で使用されている Ring the Bell の動画

イベントの中で紹介された動画の一つにインドのバースデイの話がありました。インドでは、男児は家族総出でケーキと多くのプレゼントを持って誕生日を祝ってもらえますが、

同じ家でも女兒には何もありませんでした。その哀しみを訴えるアニメーションはインドで有名になり、それがきっかけで女兒も誕生日を祝う家庭が増えたそうです。

この様な、見る側が興味を持つようなインパクトのある動画は心にも残りますし、やはり他の人にも見せたいくなる。それが、この the power of social media の重要な部分です。この団体は、現在は海外でも多くの国で活躍していますが、インド国内でも 130million 以上の女性がこの活動のおかげで DV から逃れることができました。インパクトがあるからこそ、一人一人が記憶し、そのシチュエーションになった時に思い出して行動することができる。インドの社会貢献はこれからも関心を持ってチェックしたいと思いました。

—Survivor's speak…望んでなかったわけじゃない！—

3月7日

タイトル: Prostitution and Sex Trafficking

主催者: Congregation of Our Lady of Charity of the Good Shepherd, Coalition Against Trafficking in Women International

私達インターン生の多くがタイトルから興味を持ったイベントがこの survivors talk でした。このイベントでは、アメリカの元売春婦と専門家がステージ上で彼女達の体験談を語りました。ステージ上には様々なジャンルの元売春婦が座り、全員がそこで 10 年前後の経験を経てきた事を語ります。そして全員が『望んでなかったわけじゃない…』と繰り返します。



多くの売春婦の始まりは女性軽視と幼少時代の虐待からだ、と彼女達は語ります。売春婦問題は多くの人たちが知っていることだが、それを完全に終わらせることは可能か？と

の問いに『絶対に不可能だ』と彼女達は声を揃えて答えました。ただ、それを少しでも減らすために彼女達は頑張っています。アメリカでは3分に1回レイプ事件があり、男性はレイプをするために生まれたのか？と思うほどだと言います。そして、日本と違うな、と感じたのは、売春婦問題の根元がpornにあると言われた時でした。彼女達はみな、売春婦問題を解決する為には需要(Demand)から絶っていく必要があると言います。そして、そのDemandはpornの影響が強いそうです。過激なpornで観た事を試してみたい、でも自分のガールフレンドには試せない…だから売春婦やレイプでその気持ちを解消する。売春婦を買ったりレイプをしている男性は、その瞬間自分が全ての力を持ち、女性を完全に支配していると感じます。そして、その時の体験を女性がインターネットで検索すると、必ずと言っていいほどに同じ事を行っているpornが出てくる、と言います。pornが売春を正当化する。男性がすること全てを正当化し、女性に感情があることを忘れさせる。その為、男性は後々も自分の行為に後悔をすることはない。アメリカのprostituteは日本で言われる売春婦とはまた違う必要があるようです。売春、と呼ぶよりも、正当化されたレイプと呼んだ方がいいのではないかと思う様な話でした。日本にもある文化だと思っていた事なのに、pornの廃止に熱を上げる彼女達を見ていると、それは全く異世界の話でした。



ステージ上の『元売春婦』

“Sex Work”いつからこの行為が『仕事』となってしまったのか。売春を正当化したその言葉は、仕事のように聞こえても、それは延々と続く性的暴行だと彼女達は語りました。彼女たち曰く、98%の“sex worker”は望まずにその仕事をしています。だからこそ、“sex work”という、あたかも望んでその仕事をしているかのような言葉を使うことに彼女たち自身は嫌悪感を覚え、使って欲しくない、と言います。

彼女達は売春をMonster だと言います。簡単に踏み込むことができるけれども、脱出するのはとても難しい…。

少女・女性は人間であり、暴行を行って良い相手ではない。買春は暴力であり、最終目標は平等になることだ、と彼女達は語りました。現在、世の中には女性に対する暴力を正当化するような歌が多くあり、50 cent や jayZ の様な女性に対する暴力を歌う曲が多くあります。またリアーナの様な有名人のビデオ流出も。こんな世の中だからこそ、幼少期時

代からの教育を行わなければならない。ところが、学校では買春の話をするのは嫌がられ、いつまでも改善することができない、と彼女達は語りました。

—このインターンに参加して—

今回のインターンに参加して、一番感じたのは発展途上国の力強さでした。CSW のイベントでは多くの国が集まり様々な女性問題について現状に触れることができました。

その多くは、日本では知り得なかったことで、本で読むのとはまた違う、リアルでとても近い存在に感じました。その中でも、発展途上国やまだ古い風習が強く残っていて私たちの考える『普通』が普通としてとらわれないような国の発表はとても力強く、心に深く入ってくるものがありました。

言葉が不自由なことも影響して、母国語で話す彼女達の言葉は、その意味はわからなくともその力強さに惹き込まれ、気付けば目頭が熱くなることが何度もありました。

ただ、celebration walk でも感じた通り、CSW で行っている行動は私達の様な女性問題に興味がある人やその活動をしている人が集まる場所であり、情報交換としては最適な場でも、そこに DV の加害者が来ることはありません。だからこそ、学校や家庭での幼い頃からの教育が大切なんだと感じました。

私達は日本から何ができるのでしょうか？この様な報告書、自身の使うソーシャルネットワークからの情報発信はとても大切な誰もができる行動だと思います。その様な行動から始め、今後生活していく中で子供達への教育だったり、周りの男性へ伝えることだったり、自分の生活の中で何ができるかを考えながら、いつも心の隅にこのイベントの事を留めておくことが大切です。

この様な機会をいただきました BPW の皆様、特に、インターン中お世話になりました平松様、村田様、小泉様に感謝します。この機会無しにはこの様な世界の現状に気付くこともなく、女性の問題に関しても深く考えることもなかったと思います。この機会を大切に、今後に繋げていきます。

第57回国連女性の地位委員会について

日本BPW連合会 国際委員長 平松昌子

1. 日程

第57回国連女性の地位委員会は、2013年3月4日（月）から3月15日（金）までの日程により国連本部で開催された。

2. 主要テーマ

【女性と女兒に対するあらゆる形態の暴力に対する撲滅と防止＝The Elimination and Prevention of All Forms of Violence against Women and Girls】で、「女性に対する暴力」問題は、女性にとって極めて大きな関わりを持つテーマであることから女性たちの関心は高く、委員会における各国政府代表の演説は131件、この時期NYに集まった人数は6000人、500件ほどのイベントが繰り広げられた

近年最多の数字と言われる。

特に注目しておきたいのは：

point 1：女性と女兒に対する【あらゆる形態の暴力】と言う文言で、暴力がさすものは家庭内暴力や人身売買などのほか、戦争或いは紛争などでの武力による暴力や職場でのセクハラを含む差別的待遇など広範な問題が対象になっていたことである。BPWIは職場における差別という暴力を取り上げてイベントを行っていた。

Point 2；[The Elimination and Prevention]の日本語訳について、CEDAWの日本語訳「女子差別撤廃条約」が *elimination* を撤廃と訳していたが、*Elimination of Violence* の訳語が、「暴力の撤廃」はおかしいと内閣府が使っている「暴力撲滅或いは暴力根絶」などを使用することにした。

3. NY・国連ビルを中心とする周辺の熱気＝

女性にとって重大な関心事である暴力がテーマであるためにニューヨークの国連本部周辺には世界各国から女性たちが多数つめかけた。その数6000人と言われる。NYに参集したのは、NGOだけではなく、各国政府も大臣クラスを例年以上に送り込んだために、その随員などが増えて、NYの人口を増やしたともいえる。政府代表の演説申し込みも131人と例年を上回った。

NGOが絡むイベントには、サイドイベントとパラレルイベントの2種類があり、サイドイベントは、NGOが政府または国連機関と連携して行うイベントで国連の事務当局が管理し、国連本部の施設でおこなわれる。一方、パラレルイベントは、

NGO/CSW 委員会が全ての管理を行い、会場には国連本部周辺の施設が使用される。双方併せて500件ほどのイベントが行われたから@30人×500件として延べ参加者数は15000人に達するのではないかな。

イベントの入れ替え時には入る人とで人で会場周辺は人の渦が出来ていた。

4. 公式会議〔政府間会議〕

各国代表が演説するプログラムを一般討論（General Discussion）といい、各国代表が、会議場の席でそれぞれ発言の機会が提供されるプログラムを円卓討議（Round Table）、さらに主要テーマに関する専門家によるパネル（Panel）などが順次行われる。原則公開だが、国連ビルの改修工事に伴い、傍聴できるのは各NGOに一人と制限されている。NGOが本会議を系統的にウォッチすることは不可能というのが現状である。つまり、初参加の人に一度程度様子を知るために膨張してみると言うのがせいぜいと言うところだ。但し合意結論の合議などは非公開となる。

公式会議の日程表 *は非公開の議題

	3月4日	3月5日	3月6日	3月7日	3月8日
午前	開会式・ 一般討論	一般討論	一般討論	一般討論・ *合意結論	世界女性デー・ *合意結論
昼			パネル（次回用）		
午後	円卓討論	パネル1	パネル2	パネル3	*合意結論
	3月11日	3月12日	3月13日	3月14日	3月15日
午前	一般討論	パネル4	*合意結論	決議案など	文書の作成
昼					
午後	一般討論・ *合意結論	パネル5	*合意結論 *他の議題	*合意結論	各種文書の採択・閉会

一般討論の場で、NGOも発言の要望書面を提出しておく、発言の機会を提供される可能性がある。近年は、NGOの意見を合理的に反映するために、単独で申請するより、地域別或いは目的別にNGOsが集まってコーカスを組織して申請するほうが発言を許されるチャンスが高まる。

合意結論と NGO の対応

主要テーマに対する取り組み指針を盛り込んだのが合意結論である。C S W会期前に事務局より提示された原案に対して委員国が意見を述べ文案に修正を加えていく。事務局が作成した合意結論の原案はゼロ案ともいわれ、事前に各国に通知されるとともにネットに公開される。従って、この段階でNGOが、この「合意結論」への意見や要望をまとめて政府に申し入れておくことは可能だが、日本の場合、英語の文書を読んで早急に意見をまとめることは不可能に近いのが現状といえる。

C S W会期中の合意結論の審議は、日程表にあるように非公開での審議となる。NGOはこれまでも再三、傍聴を認めるようC S W議長団に申し入れてきたが、一部の国の反対で実現していない。日本のNGOがどこまで動けるかは？が残る。

合意結論の審議

日本の場合、政府代表団にNGO代表の参加を認めるよう要望書を提出し続けた結果、NGO 代表としての政府代表団への参加が認められている。審議中に意見を申し入れることがどこまで可能か。今後の課題かもしれないが、今回、NGO代表として審議に同席する中で、幾つかの発見があった。

- ◆ **反対意見との折り合い**＝女性に関する議論で、必ず反対がでる条項がある。特にバチカン関係（ホーリー・シー）やイスラム関係の代表の反対によるリプロ関係などもその一つ。彼らは、その言葉を絶対に容認しないので、その場で説得して姿勢が変わるとか、少々表現を変えて受け入れられることはない。であれば、世界の女性問題解決に向けてどのように対応するか、これは複眼的に対応する必要があると、今回、非公開会議に同席を許されたことで考えさせられたことである。
- ◆ **不一致の中での採択**＝今回の主要テーマは女性に対する暴力防止と撲滅という極めて関心の高いものであり、一步でも問題解決を前に進めるためにはどうしてもこの合意結論を採択する必要があったし、審議開始前にはみながこの合意結論を前回のようにな採択で流すことは許されないということでは一致していた。そこで取られた措置は、全員が合意できる条項を順次片付けていくという方式だった。出来なかったものが残された。
- ◆ **議長提案による合意結論**＝そして最終日、合意に至った項目、或いは殆どが合意する項目での議長案が各国代表に渡された。
「女性の暴力被害を減らすことは **MUST** の課題であり、各国が賛成できる文言で作成した議長提案です。ご検討の上、票決をお願いします」
この合意結論は採択され、バチカンなどは留保条項で発言して終わった。

- ◆ この作戦考えたのは、UN Women のバチェレ事務局長だと信じている。幾つかの理由がある。前日夕刻、審議中に議長団席に顔をだし「各位の労をねぎらった後、明日の今頃は終わりのご挨拶をしている時間ですね。ご挨拶の文章は書き上げていますが・・・」といった趣旨の発言をしたこともひとつのヒントになるかもしれない。
- ◆ バチェレ事務局長の挨拶＝自分は、諸般の事情で最後の採決場面の頃にはすでに東京行きのフライトの中にいた。そして東京に着き、事務所でメールを開いて感動を禁じ得なかった。UN Women の【合意結論採択を歓迎】という文字がおどり、バチェレ UN Women 事務局長のご挨拶が載っていたのである。



バチェレ事務局長の挨拶の中にNGOの役割を明確に示す言葉があった。その中から：

私たちは女性と女児の権利を守るために来たのです。
私たちは声を上げるためにここにいるのです。
女性に対する暴力と差別がなくなる限り、平和も進歩ありません。
もう後戻りはしない。前に向かって進みましょう。
私たち全ての願いは、ジェンダー平等の実現です。

- ◆合意結論採択についての UN Women の文書は付録2 参照のこと

5. サイドイベント

会期中、全部で 126 件のサイドイベントが行われたが、日本としては、日本政府国連代表部と N G O 3 団体（国連 N G O 国内婦人委員会、国際婦人年連絡会、それに JAWW=日本女性監視機構）による初の共催事業として以下のように実施した。

日 時：3 月 6 日 11:30-12:45 の 75 分のイベント

テーマ：「女性に対する暴力の現状と対策 Situation and Measures against Women」

今回特に気遣ったのは、女性に対する暴力の現状を述べるだけではなく、同時に、どのような対策をとったか或いは取るべきかについて説明することで、4 人のスピーカーにもその方向での発言を依頼した。



4 人のスピーカーは以下のとおり：

1. 城倉純子（日本大学女性協会）デート暴力の深刻な現状と対策
2. 百生詩緒子（J I C A） 人身取引被害者支援（タイにおける事例）
3. エリザベス・ベンハム（B P W I 前会長）女性と経済：暴力への影響
4. 別府充彦（内閣官房審議官） 東日本大震災に於ける暴力被害者相談



奥で立って発言しているのは山崎大使



71 名の会場に 100 名以上が参加

準備作業及び当日の作業に際し、B P W が主要な責任を分担したため、インターンの 4 人には当日の作業としてそれぞれ会場の設営や進行でパワーを発揮し、関係者の評価をうけた。



6. パラレルイベント

NGOが主催し、全体の運営管理もNGO・CSW委員会によって行われるイベントで、各国のNGOが、自分たちの現状や主張を発信出来るチャンスである。

バチレ事務局長は「私たちは、声を出すためにここに来たのです」とアピールしたとおりである。テーマに規制はないが、主としてその年度のCSWの主要テーマに沿ったイベントを展開する。

今回は女性と暴力、家庭内暴力といった限定された暴力に留まらず、幅広い内容を含むテーマであったことが、多くの関心と呼びかけ350以上400近いパラレルイベントが開催された。具体的な内容はインターンの皆さんの報告が伝えるとおりである。

7. まとめ

CSWが開催される時期のニューヨークは春まだ浅く、雪に見舞われることも少なくない。しかし、この時期、ニューヨーク、特に国連周辺は熱い熱気が溢れている。女性が抱える問題がいかに大きいということだろうか。女性への格差を訴えるパワー、女性への差別解消に向けて努力するエネルギー。国連前のチャーチセンタービルでは、午前8時半から夕方7時過ぎまで、びっしりイベントスケジュールが詰まっていた。イベントの中には性暴力の被害者がじかに訴えるシーンがあり、慰安婦問題については日本政府への解決をもとめると同時に、近年各地で頻発する紛争の中で女性への性暴力が解消しないばかりか増えていることに対する国際的な規制作りへの提案など、注目すべきワークショップも展開されていた。国際的な罰則を含むルール作りへの提案は、これから重くのしかかる作業の一つになるだろう。

NGOsのこうしたルール作りへの動きが今後のCSWの議題になるよう祈りたい。私たち女性の生活に大きな影響をもたらした【女性差別撤廃条約】もCSWでの審議で纏められたのであることを思い出しておく必要がある。

今回も、譲れない項目を抱えた国（代表）があった。しかし、女性の幸せのために、何が必要かを考え、合意点を見つけてどのように解決していくか。その方法への大きな学びが今回あったと思う。

「女性に対する暴力の撲滅と防止」は参加者全員が求める課題ではないか。それであれば、現状を一步でも前に進めるために「合意結論」は採択されなければならない。

こうして、議長団が調整したという合意結論案が提示され、採択された。

土壇場でドラマが描かれたという人もあるが、採択するにはどうするかというテクニックを習得必要のあることを体験したことが今回のまとめかもしれない。

付録 1

国連女性の地位委員会 (UN CSW=Commission for the Status of Women)とは

- A. **何時・何処で**=毎年3月8日の世界女性デーを挟むように、2月の末、或いは3月始めの月曜日から2週間の日程で、ニューヨークの国連本部で開催される。
- B. **誰が・何を決める**=委員会は地域別に選出された45カ国の政府代表で構成され、男女平等の実現に向けて毎年設定される「**主要テーマ**」について議論し、その結果を盛り込んだ「**合意結論**」や、緊急な問題の「**決議案**」を最終日に採択する。
- C. 「**主要テーマ**」と「**合意結論**」=「**主要テーマ**」とは近年北京女性会議（1995）で採択された北京行動綱領の12項目の中から、ひとつの項目を取り上げる方式で行われ、2013年は【女性と暴力】に冠するテーマが取り上げられた。主要テーマは、前年の会議で決定される。
「合意結論」とは、予め行われる専門家による検討会議の報告書をもとに、事務局が原案を作成し、CSW開催前に、「合意結論ゼロ案」として、政府関係者に通知されるほかネット上にも公開される。CSWの各国政府委員は会期中この原案について意見を交わし文案を修正して、最終日に採択に付される。
- D. **合意結論の行方**=採択された合意結論は、条約のように各国政府を縛るものではないが、政府の努力目標であり、NGOとしては政府の施策を見守る必要がある。一方、国連のプロセスとして、採択された合意結論は事務総長に報告され、必要な案件や項目についてはさらに第3委員会でも検討され、総会に上程される。
- E. **NGO と CSW の関係**=各NGOは、この委員会に合わせて、ニューヨークに参集し、女性が抱える諸問題に関するイベントなどを展開して男女平等の実現を妨げている問題の存在をアピールし、解決に向けての団体相互の或いは政府や国際機関との連帯を訴え、さらには合意結論への意見などをアピールする。

付録2

合意結論採択に関するUN Women のコメント

2月8日に議長団が公表した合意結論ゼロドラフトは、7ページだったものが、最終日の討議には21ページに増えていた。意見の調整が着かないまま最終日、午前9時から討議が再開された。昨年のような「合意結論採択できず」という不名誉を避けたいという願いは会場の空気に溢れていたが、一部での特定の文言への反対は頑強で妥協の気配はなかった。そして閉会式予定の時間、議長による「合意結論最終提案」が提示されこれが採択された。以下の文章は、その採択を歓迎し、CSWの成功を歓迎するUN Womenのコメントである。（平松仮訳）

#57 CSWの閉会に際して、UN Women は、その成果を歓迎する。

第57回女性の地位委員会の結果について、UN Women はその成果を歓迎する。

「合意結論」とは、加盟各国政府にとって、正義を行うこと、つまり女性と女兒に対する暴力の防止と撲滅の実施を約束することへの確たる指針（testimony）である。

NYでの2週間の会合（CSW）を通して、私たちは、市民社会（NGO）による質の高い国際間の取り決めや計画、発言を目の当たりにすると共に、多くの理事国政府もその指導力を確実に示していた。

この委員会（CSW）に寄せる世界各国の女性や女兒の期待は、極めて大きい。

女性に対する暴力は世界的な問題であり、世界的な回答が求められており、今、その回答が出されたのである。

暴力は、さまざまな形をとって、ほぼ全ての国で或いはさまざまな状況の下で発生している：すなわち、これ（暴力）が、女性や家族や社会を傷つけ、開発を妨げ、医療費や生産性の喪失などで、年間10億ドル以上の損失をもたらしているのだ。

2003年にCSWが、[女性と人権に対する暴力]を取り上げたとき、理事国は合意に達することが出来なかった。

それ故に、私は今年こそ、女性と女兒に対する暴力を終結させるためにも合意に至るようと、特別な思いを抱いていた。

この合意は、十分は十分（enough is enough）と言う世界中の大合唱と響きあっている。

CSWが採択したこの文書は、女性と女兒に対して広がっている暴力を最も激しい言葉で非難しているし、一層の関心を払うことを求めており、（暴力への）防止と対策を加速することを求めている。

UN Women は、この合意結論が 教育や知識の向上や、政治的、経済的、社会的場面でのジェンダー不平等を指摘する事を、暴力防止に向けての重要な焦点と位置づけていることを歓迎する。

女性に対する暴力を終わらせる最善策は、最初の場所での発生をやめさせることである。

この文書（合意結論）は、暴力の被害体験者（survivor）に対し、多方面の救済措置、すなわち医療の面からも、心理の面からも、カウンセリングなどの面からも、超短期的な支援を受けられるようにすることの重要性を強調している。

この文書は、性的（sexual）或いは生殖（reproductive health）での健康を保持する権利を守ることへの支援の必要性 に関心を持つよう指摘している。

常習者の処罰が、処罰から逃げることを防止するための重要な手段として強調されており、同時に有効な対応をするための資料について、その根拠と信頼性を改善することが必要だとしている。

この文書を採択することは、各政府が、女性と女兒に対する差別と暴力が、21世紀には居場所がないことを明確にすることにある。

政府は、議論の中で、女性と女兒に対する暴力を終息させるための具体的な施策とすること、及び女性の人権と基本的な自由を守ることへの約束と責任を再確認してきた。

合意は、女性と女兒の権利と尊厳を実現するための一歩である。

しかし、私たちはここで立ち止まるわけには行かない。

私たちにはもっとすることがある。

今こそ、言葉を、行為や行動と一致させる必要がある。

今こそ、実施と責任を果たすときだ。

今こそ、私たちは確信と責任を抱いて前進し続けなければならない。

UN Women は、国連というシステムの中で協力者として、強力で強調的な支援を通して、女性と女兒の権利を前に進め続けていくつもりである。

我々は加盟国政府と共に、女性と女兒に対する具体的な成果を目指して女性の地位委員会での合意結論を動かすよう働くつもりである。

私たちは、長年かかって手にしてきた女性の権利に関する国際取り決め、すなわち女子差別撤廃条約、北京行動綱領、人口と開発の国際取り決め、その他の合意や条約などで明確に示されているように、女性の権利に関する国際的合意の基礎作りに向けて前進し、積み上げていくつもりである。

後戻りはできない。

私たちは女性と女兒が、恐怖、暴力それに差別から解放されて生きることができる其の日に向かって前進し続けよう。

21世紀は、参加の世紀であり、女性の完全で対等な権利と役割を担う世紀である。



The Pod 39

ホテルは『The Pod 39』というデザイナーホテルのようなお洒落で安いホテルに滞在した。二人で一部屋をシェアして2日から10日8泊で約70,000円だった。国連にも近く、周りにも24時間デリやコンビニがあり便利だった。ホテルの中にはお洒落なバーもあり、スタッフもとても優しく気が利く人たちばかりで過ごしやすかった。

Scotty's Diner

このホテルの近くの Scotty's Diner という24時間営業しているレストランがあり、私が個人的にとっても気に入った場所の一つ。それがとても気さくで優しくユーモアに溢れた店員さんたちと、レストランのメニューである。すごくお洒落ですごく美味しい！というわけではないのだが、値段もリーズナブルでなんといっても観光客というよりニューヨーカーになった気分を味わえるからだ！ホテルから近い事もあり、滞在中何度も足を運び、店員さんとも仲良くなり、ニューヨークに次回行く事があればまた是非行きたい場所だ。



Scotty's Diner の美味しいチーズケーキ



Grand Central Station... Market!

グランドセントラル駅内のマーケットが最高だった。とにかく最高だったので是非見に行き、そこのデリを楽しんで欲しい！他のコンビニやデリ屋さんのお惣菜とはわけが違う美味しさだった。

...from Nana Imai

NY の教会で本場のゴスペルを体験する

ニューヨークへ行ったらぜひ体験してほしいことが、教会でゴスペルを聴くことだ。

私は NGO の活動がお休みの日曜日を利用し、ニューヨークの黒人教会としては最古と言われる Abyssinian Baptist Church に行った。



ゴスペルを聴けるのが 9 時からと 11 時からという情報をもとに 9 時前には現地に到着していたものの、その日が「世界女性の日」に近かったため特別な催し物が行われており、11 時からしか教会内に入ることができず、極寒の朝、屋外で待機することになってしまった。

私たちと同じような観光客は大勢いて、外には長蛇の列ができていた。右の写真は音楽をかけて観光客を楽しませ、CD を売っているおじさんとの写真だ。

いつもここにいるのであろう、教会の人とも親しそうに話をしていた。2 時間以上の待機ですすがに体力を奪われたが、教会内で味わえる感動で疲れは吹き飛んでしまった。教会中に響き渡るゴスペルは本当に美しく、迫力満点。涙が出る程感無量であった。この日は特別なゲスト歌手も来ており、ソウルフルなゴスペルの響きと彼女の歌声に魅了され、最後には会場の誰もが立ち上がってリズムを取っていた。また、ゴスペル以外のことであるが、私にとってはキリスト教のお話も新鮮であったし、観光客の私たちに、教壇で話をされる人が歓迎の言葉をくれたことにも感激した。いつかまたゴスペルを聴きに教会を訪れ、心が元気になるような体験をしたいと思う。



...from Yuri Kato

国連本会議場

NY はどこを歩いても感動的な発見の連続！そんな中、特におすすめなのがなんといっても国連本会議場！会場に入った瞬間に鳥肌が立ちます。警備員のおじさんと仲良くなって、議席前まで行かせてもらおうとまた違った感動が。パスを受け取ったらぜひ行ってみてください。



ミュージカル、美術館、図書館

ミュージカル、美術館や図書館も時間があればぜひ行くことをおすすめします。本場のミュージカルはやっぱりすごい！音楽、ダンス、歌に魅了されて、あっという間に時間がたってしまいます。美術館や市立図書館も、建物からグッズまでどこをとっても抜かりないものばかり。私のように知識があまりなくても十分楽しめるので、行くことをおすすめします！

...From Rikako Takei

舞台：スパイダーマン

ブロードウェイ史上1番お金のかかった舞台で有名。何度も空中を舞う演出は2階席から見るのがオススメ。どんな人も理解できるわかりやすいアメリカらしい舞台が『アメリカでの経験!』と感ずること間違いなし。



ベーグルの老舗

ニューヨーカーにとっても有名なベーグルの老舗店。ベーグルの種類や中の具を全て自分で選びます。エッグベネディクトで有名なサラベスなど、日本では行列必至のお店もNYなら並ばずに楽しめます





特定非営利活動法人日本 **BPW** 連合会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-21-11 婦選会館 303

TEL 03-5304-7874 FAX 03-5304-7876

E-mail office@bpw-japan.jp

URL <http://www.bpw-japan.jp/>